

ブラック企業に勤めている鈴木一郎は限界だった。というわけで、横領して逃亡した。

「げんきなワレツ、いてもうたるどツ!!」

彼の最大の不幸は鉄砲玉とおなじエレベーターに乗り合わせたことだろう。

鈴木一郎はその名が象徴するとおり平々凡々な人生を送ってきた。

父親は会社員、母親は専業主婦。

長男だから一郎という、由来を知って脱力した安直なネーミング。

日本人の代表的姓鈴木と、推敲の間を放棄してわかりやすさに特化した名前の組み合わせをネタに子供の頃からさんざんからかわれ、ややもすると優柔不断で自己主張がでない性格になってしまったが、普通すぎてむしろ個人的な名前の他は容姿・頭脳、全てにおいて可も不可もない中庸路線を極めている。

けっして裕福ではないまでも安定した収入のある中流家庭に生まれ育ち、地元の小中校を経てそこそこの高校からまあまあの大学へ進み、世間様に恥じる程の欠点もない代わり自慢できる点も見当たらぬパツとしない人生を歩んできた彼の悩み事といえば、履歴書だ。

履歴書の賞罰、趣味特技備考欄は書くことに困る。

読書感想文で表彰されたことも学校中の窓ガラスを叩き割って停学くらったこともない。

理由なき反抗や青春の勲章とは無縁に、ぼつさり切ってしまえば安全第一のつまらない生き方をしてきたせいで、履歴書が非常にそっけない仕上がりになってしまるのが常に悩みのタネだ。

今の会社に提出する際も余白が眩しい用紙と睨み合い、さすがにこれじゃまずかろうと一時間ばかり悩んだすえにボールペンを舐め、趣味の欄に「人間観察」と付け足した。

履歴書の余白を埋めたい一心で人間観察を趣味にこじつけた一郎の目から見ても、おなじエレベーターに乗り合わせた男が堅気じゃないことはよくわかる。

「おうなんじやないそのツラは、お口チャックでだんまりか。おどれは塗り壁か？ そうやってぬぼつと突っ立つてガン利かせて、タツパだけで勝つたつもりか？」

むしろ一方的にガンつけてるのではと、突っ込みたいのをぐっところえる。

黒地に絢爛な金糸で虎を刺繍した今時それはどうだろうという派手派手しい革ジャン、逆立てた髪は日本人にはありえない金色、黄色いサンングラスごしの双眸は気性の激しさを映して険悪に吊りあがる。

チンピラだ。

チンピラは大層怒っている。

原因は――

「……シカトかい。関西人とは話もできんちゅうんか。どうあつても通さん言うんなら……」

続く展開を予期し、ひっと耳を塞ぐ。

「力づくでぶち破つたるわ!」

厚い靴底が扉にぶちあたる。  
どう見ても堅気ではない。

そもそもエレベーターの扉に喧嘩を売つてる時点でまともな人間の範疇から外れる。

があん、があん。

間延びした轟音が棺を縦にしたような直方体の空間にけたたましく反響する。

靴底で激しく扉を蹴り穿ち、訛りまくりの関西弁でがなりたてる。

「エレベーターの分際で勝手にとまりよってボケカスが、お客さまを目的地まですみやかにお連れするんが仕事ちゃうんかい、それを何やチーンも言わずだんまりかい!? 阿呆くさ、こんなムダな時間食いよるんやつたら階段使うんやつたわ、そっちのが確実やんけ! エレベーターならばほんぼんばーんであつちゅうまにイける思て乗り込んだんが

間違いやつた、詐欺ちやうかこれ!」

ごつい靴でたてつづけに蹴りつける。

厚い靴底が扉の表面と激突、轟音と振動が狭い空間に響く。そのつど一郎は首を竦め、懐の鞆を抱く。

「おどれがそのつもりなら考えあるでえ、死んだ旦那に操を立てる未亡人の如くぴっちり閉じた股ぐら力づくで開けたるわい、言うどくけど容赦せえへんぞ、俺の太いのでおどれの秘密の扉を奥の奥までこじ開けて全てを暴いたる、淑女ぶつてもあかんで、おどれが誰彼かまわず股おつぴらく淫乱てとうにネタ割れとんじやい……」

ぜいぜい息を切らしつつチンピラがドアを蹴るたび縦揺れが襲い、三半規管がぐわんぐわん攪拌される。

なんで俺がこんな目に。

人生かかつてる大事な時に。

若者は完全にまわりが見えなくなつてる。

サングラスに隠れた顔の造作は不明だが、がんがん狂つたようにドアを蹴りつける剣幕からは鉄火肌の気質が窺える。おそらく、非常にキレイやすい性格なのだろう。

このままじゃドアを破壊しかねない。

「フィストキックじゃあ!!」

「あ、あの、あのなーきみ」

刺激せぬようびくつきつつ、棒読みで呼びかける。

関わりたくないのが心の底からの本音だが、1メートルと離れてないのではそうもいくまい。このまま暴れられたら警備員が来てしまう。

トラブルに巻き込まれ時間をくうのは避けたい。一郎は今、罪を犯して逃亡中なのだから。

「……悪いけど、静かにしてくれないか。人様の迷惑だ」

「人て、具体的に」

「え」

「エレベーターは宙ぶらりん。ドアは開かん。騒音に迷惑する他人がどこにおる」

わざとらしく手庇を作り見回すチンピラに対し、小首を傾げ自信なさげに答える。

「俺？ とか……」

「疑問形かい」

体ごと向き直ってサングラスをちよいとずらす。

レンズのむこうから覗く目は酷薄の一言に尽きる。

「うるさいか、俺は。ジャマか？」

「エレベーターが故障した時はじっとしてたほうがいいぞ……」

このビル電気系統がいかれてるみたいでさ、時々止まるんだ。五分くらいで直るけど」

「前にもあつたんかい」

こくこく首を振る。

急激に殺気が萎み、怪訝そうな表情が取って代わる。

「ーちゅーかあんさん、いつからおった」

「最初からいたけど……」

「何階から乗った」

答えようとして、口を嚙む。

「なんや？ 言えへんのか？」

このがさつな若者が、あのブラック会社と関係あるはずないとおもいたいが……

悶々と打算が渦巻く。

悶々と疑心が苛む。

早くも胃が痛くなってきた。

鈴木一郎は真面目で保守的でツマらない男だ。周囲にさんざんそう言われてきたし、自分でもそう思う。

よくいえば無難、悪くいえば凡庸。

大学生の頃までは自分はきつとそこそこの会社に就職し、そこそこの人と結婚してそこそこの家庭を築くんだろう

なあと将来設計ともつかぬ漠然さで想像していた。

そして当時、一郎が漠然と思い描いた「将来起こり得るか

もしれないもしもリスト」のどこにも、「他人とエレベーターに閉じ込められ取り残される」というドラマティックな項目はなかった。

暇潰しに作成した「もしもリスト」で一番意外性ある項目は「お年玉付き年賀状で一万円あたる」。せめて十万円ぐらいは夢を見ればいいのに、せいこい。嵐が凧ぐ。

暴れ続けて体力を消耗したのか単純に飽きたのか、最後に一蹴り見舞うや一郎へと興味を移す。

「あんさん、このビルの人間か」  
「まずい。」

大股で引き返してくるや正面にどつかと胡坐をかく。

「ものごつつ痺れたわ。あいつ強情じゃ」

「はあ……」

「蹴っても殴ってもよう反応せん。不感症じゃ」

淫乱よばわりの次は不感症か。どつちだ。

「お互い災難やな、こんなエレベーターに乗ってもうたばかりに」

「まさか止まるなんて」

「セイテンノヘキレキ」

「むずかしい言葉知ってるじゃないか」

「泣かすぞワレ。ガキかて知つとるわいヘキレキぐらい、

常識じゃ。関西人がエレキしか知らん思たら大違いやぞ」  
感心する一郎にガンをつける。修羅場をくぐった目つきの迫力に、おもわず懐のバッグを抱き直す。

ドアを蹴っても足を痛めるだけと遅ればせながら悟ったか、無反応の相手につつかかるのに飽きたか。

チンピラは隅つこで怯える一郎にロックオンし、ぶつきらぼうに話をふる。

「いつ動く」

「さあ……なるべく早いといいけど。わからないな」

「じゃあない、待つか」

「すぐ再開するさ。エレベーターがこなかつたら待つてる人が騒ぐだろうし……」

希望的観測を口にし、四角い天井を仰ぐ。

一郎の視線を追って天井を仰ぎ、名前も知らない若者が喚く。

「ポロいビルさかいガタきとんのか」

「テナント料もすごく安い。四階と七階は空きだし……電気も点いたり消えたりで、口が悪い近所の人は幽霊ビルって呼んでる」

「やっぱこのビルのもんか」

「やってしまった。」

動揺を見抜き、してやったりとほくそえむ。

「水臭いで、隠す事あらへん。俺もここに用があるんや」

「関西人……大阪？」

「ただ待つとんのも暇さかい、おしやべりしよか」

「フレームに指をひっかけサングラスを前傾、一郎を見る。

「青は競歩で黄色は走る、赤は猛ダツシユ」

「は？」

「さてなんや」

若者の目が挑戦的に光る。一郎は考え、おそろおそろ告げる。

「信号、か？」

「ピンポン。冴えとんであんさん、大阪の人間はせかせか歩く。皆で渡れば怖くない、おどれ負けるかワイ先じや。

ほなヨーイドンでチキンレースのはじまりはじまり。東京もんはお上品やな、青に変わるまでちゃんと待つとる。ツンとすましてヤなかんじ」

「それがマナーだ」

「マナーがなんぼのマナーになるつちゆうねん、信号ちかちかはいざ勝負の合図やろ、血が滾らんかい？」

「パドック入りした競走馬じやなし……関西人こそ血の気が多すぎだ」

「東京入りしてびつくらこいたわ、ドア開いてひと降りるまで電車乗らんと待つとんのな。大阪はおしくらまんじゆ

うやで」

「やっぱり大阪か」

「格好見てわからんかい」

若者が笑い、身をよじってジャンパーの背中を示す。

一郎は素直に頷く。

「フアツシヨンがげばげばしいからそうじやないかとおもった」

「ちやうわアホ。虎や。虎といえばんんや？——阪神じや」  
気分を害し、背中の虎を叩いてアピールする。注目はそこか。

とりあえず無難な感想を口にする。

「……かっこいい革ジャンだな」

「せやろ？ アメリカ村で買ったんや」

誇らしげに胸を張る。次の瞬間、声が凄味を含む。

「……で、どの球団鼻肩じや」

巨人だと答えたら利発小坊主の逸話よろしく、実体伴って具現した背中の虎に噛み殺されそうな雰囲気。

というか、「阪神以外の球団あげたらどたまいてもうたると」と顔にでかでか書いてある。

「野球は興味なくて……」

曖昧に言葉を濁し、俯く。

「はあ？」と素っ頓狂な声をだし、ぎよろ目をひん剥く。

「日本人に生まれて野球に興味ないてつまらんやつちゃのう」

余計なお世話だ。

どうせつまらない人間だ。

己を卑下し落ち込む一郎をよそに、若者はドアを睨んで呟く。

「ベースがおつたら一撃で吹っ飛ばしてくれんやけど」

「ぶつかつたら危ない。とういか君ベースの現役知らないだろ、まだ生まれてもないよ」

「ほならあんさんは知つとんのか？」

「知らないけど……」

「ベースの破壊力ナマで見たことないくせにほざくなや」

「待て、いつベースを侮辱した？」

「ベースの棍棒じゃドアのおかちめんこぶち破れん言うたやんけ、今」

「エレベーターの中で長くて固いものをぶん回すのは感心しないって言つたんだ」

「せやけど今ここにベースの使たバッドがあつたら振るやろ？ ファン心理として」

「振らない。人巻き込んで怪我させたら大変だ、気持ちはわかるけどエレベーターでぶん回すなんて非常識な自殺行為」

「かあつ!!」

痰を吐く真似をし、次第に熱くなりつつある一郎の主張を遮る。

「もしもの話しとんのに安全面の是非論じられても困るがな。そもそもドア開かん前提なのに、どないして屋上で素振りするんや？」

「あ」

盲点だった。

「バッドでぶち破らんでも開けば苦勞せんわ」

あほくさと片手をひらつかせる。

「これさかい頭でつかちはつきあいきれん。せやけど妙にベースに詳しいな」

「俺はよく知らないけど親父がファンで……」

「先言いや」